

2021年度 東北大学前期試験 国語解答・解説及び配点予想

※ ここでは国語を100点満点で考えています。学部学科によって満点が異なることも考えられますが、配点のポイントは共通であると考えられます。

一【現代文】

【解答例】

問一 1 陥没 2 輪郭 3 冒頭 4 培 5 渦中

問二 未知の事態への思いを言葉にできず何をすべきかわからないこと。(三十文字)

問三 未知の経験を詩や歌にして新たな言葉を生み出すことで、内面の思いに区切りがつけられるから。(四十四文字)

問四 既存の知識や構想を捨て去り、新たな言葉を生み出す場所に戻ることで、未知の経験を組織化できること。(四十八文字)

問五 吟遊詩人が新たな言葉を生み出すことで思いに区切りを付けるように、哲学者も未知の事態に対して既存の知識を捨てて、新たな言葉の生まれる場所に戻ることで、経験を組織化すべきだということ。(九十文字)

【配点予想】(三十点)

問一 1点×5 解答通り

問二 3点 ニュアンスが出ていれば可。

※末尾の句点を脱した場合、1点減(以下同じ)。

問三 6点 ポイント以下の通り

a 前半が過不足なく説明されているか 3点

b 後半が過不足なく説明されているか 3点

※ 末尾が「から」「ため」になっていない場合、1点減。

問四 6点 ポイント以下の通り

a 「捨てること」の内容が過不足なく説明されているか 3点

b 「初めて見えてくる」の内容が過不足なく説明されているか 3点

問五 10点 ポイント以下の通り

a 「詩人」の営みが過不足なく説明されているか 4点

b 「哲学」の営みが過不足なく説明されているか 4点

c a・bが共通することが説明されているか 2点

【解説(総合)】

河本英夫「経験のリセットする 理論哲学から行為哲学へ」からの出題。既存の知識や構想を捨てて未知の事態に対する新たな言葉を生み出し現象を新たに組織化する「吟遊の哲学」について述べる。本文の長さや設問数はほぼ例年通りで、部分的な文脈と全体の趣旨の問いをバランスよく組み合わせた良問。

【解説(設問ごと)】

問一 漢字問題。標準的なものである。

問二 傍線部「持って行き場がない」とはどのようなことか説明する問題。直後の文脈が言い換えである。

問三 なぜ詩や歌が作られたのと筆者が考えているかを問う問題。主題設問なので問二・四をベースにして答える。

問四 傍線部「捨てることで初めて見えてくる」とはどのようなことを指すかを問う問題。傍線部エの直前が言い換えである。

問五 傍線部「吟遊する哲学は、ある種の詩人でなければならない」とはどういうことかを、本文全体の内容を踏まえて説明する問題。指定に沿って、ここまでの内容をまとめる。

二【現代文】

【解答例】

問一 1 興ざめすること 2 念を押すこと

問二 祖父母と翔太は二度と会えないと、内心では思っているから。(二十八字)

問三 祖父母と翔太が疎遠だったことで、かえって二度と会えないことの辛さが軽くなること。(四十字)

問四 自分たちの離婚のせいでもう二度と会えなくなるかもしれない、祖父母と翔太の会話を聞くのが次第に気まずくなってきたから。(五十八字)

問五 離婚により会えなくなるかもしれない翔太を案じていたまなざしが、自分一人で駅のホームから降りて東京に向けて走り出す背中を頼もしく見るように変化した。(七十三字)

【配点予想】(三十点)

問一 1点×2 解答通り

問二 4点 ニュアンスが出ていれば可。

※ 句末が「から」「ため」となっていない場合、1点減。

※ 末尾の句点を脱した場合、1点減(以下同じ)。

問三 6点 ポイント以下の通り

a 翔太と祖父母の関係を過不足なく説明しているか 3点

b 「お互いによかった」の内容を過不足なく説明しているか 3点

問四 8点 ポイント以下の通り

a 場面の状況を過不足なく説明しているか 4点

b aが自分と妻の離婚のせいであることを説明しているか 4点

問五 10点 ポイント以下の通り

a 前半の状況を過不足なく説明しているか 3点

b 末尾の部分の状況を過不足なく説明しているか 3点

c 「まなざしの変化」を対比的に説明しているか 4点

【解説(総合)】

重松清「鷹乃学習」からの出題。離婚を前に里帰りした語り手の、息子に対するまなざしの変化を述べる。本文の長さや設問数はほぼ例年通りで、設問も標準的で、とりわけ最後の「全体の変化」の問いは頻出の形。

【解説(設問ごと)】

問一 語彙問題。標準的なものである。

問二 傍線部「早口になった」という態度を取った理由を問う問題。そこまでの文脈を整理する。字数が少ないので、直前の事実関係のみで良いものと思われる。

問三 「どういうことか」なので傍線部の言い換え。直前の事実関係を説明すれば良い。

問四 「私」がビールを苦く感じる理由の説明。十二ページ傍線部までで三回ビールが苦いことが反復されており、そこから祖父母と翔太の会話のぎこちなさが読み取れる。

問五 傍線部「遠ざかる息子の背中を、じっと見つめた」に「私」のどのような思いが表れているかを、本文全体を通じた「まなざし」の変化に即して説明する問題。前半と後半を対比的にまとめる。

三 古文

【解答】

問一 (1) 立派に与えられたので

(2) いっそう荒れ果ててさびれている

問二 豊国神社の馬場は大変広いので、絹糸を長くよるのにふさわしい場所であるということ。(四十字)

問三 豊国神社に参詣するために大勢の人が列をなして押し寄せる様子。(三十字)

問四 普段は豊国神社を見向きもしていなかった京の人々が、大地震で豊国神社が揺れなかったと知るとたん、列をなして参拝したから。(六十字)

問五 豊国神社の霊力によって、大地震から自分の家を守ってほしいと願ったから。(三十五字)

【配点予想】(二十点)

問一 1点×2 計2点

問二 4点

以下のことが指摘されていればよい。

- ・「豊国神社の馬場が大変広いので」(2点)
- ・「絹糸を長くよるのにふさわしい場所である」(2点)

問三 4点

以下のことが指摘されていればよい。

- ・「豊国神社に参詣するために」(2点)
- ・「大勢の人が列をなして押し寄せる」(2点)

問四 6点

以下のことが指摘されていればよい。

- ・「京の人々が、普段豊国神社を思い出しもしていなかったのに」(2点)
- ・「豊国神社が大地震で揺れなかったと知ると」(2点)
- ・「列をなして参拝した」(2点)

問五 4点

以下のことが指摘されていればよい。

- ・「豊国神社の霊力によって」(2点)
- ・「大地震から自分の家を守ってほしいと願った」(2点)

【解説】

江戸時代初期の仮名草子『かなめいし』（浅井了意）からの出題。ここ数年の傾向同様、本文全体の大意は分かりやすい。ただし、設問を解くには字数におさめる文章力と、十分な語彙力が求められる。

問(一) (1)「いかめし」は、「立派だ」「盛大だ」の意。「られ」は、受身の助動詞「らる」の連用形。「しか」は、過去の助動詞「き」の已然形。「ば」は、已然形に接続しているため、確定条件として訳す。

(2)「いとど」は、「いっそう」「ますます」の意。「物さぶ」は、「荒れ果ててさびれている」の意。「たり」は、完了・存続の助動詞の終止形。

問(二) 「広ければ」の「ば」は、「広けれ」が已然形なので、確定条件。「にこそ」は、断定の助動詞「なり」の連用形「に」＋係助詞「こそ」。直前から、豊国神社の馬場が広くて、絹糸を長くよるために、好都合であったということを読み取る。

問(三) 「蟻の熊野まわり」とは、「熊野詣でをする人が、蟻の行列のように続く」ということ。第二段落から、京中の人々が、大地震で少しも被害の無かった豊国神社に地震除けの霊力があると信じて、大勢押し寄せたということを読み取る。

問(四) 第二段落・第三段落の内容をふまえる。傍線部の「けしからず」は「感心できない」という意味。大地震の前後の人々の豊国神社への態度の変化を説明する。

問(五) 第四段落の内容をふまえる。最後に「豊国にあやかりて、町家もゆらであらなんと思ひけるなるべし」とある。なお、「あらなん」の「あら」はラ変動詞「あり」の未然形。未然形の下「なん」は、願望の終助詞である。

【全訳】

伏見街道（沿い）に住んでいた者は、絹糸を繕って生計を立てている。その（絹糸の）丈は長く繕うものなので、町なかではなかなかうまくいかない。（住居から）距離が近いので、豊国神社の馬場に行って、毎日糸を繕う。（その馬場は、長い丈の絹糸を繕うには）理想的に広いので、本当に良い場所であった。五月一日にも、そこに出て糸を繕っていたが、都の中も近辺もすべて、上を下への大騒ぎで大混乱した大地震が、豊国神社の辺りでは、少しも揺れなかった。人が参詣することもまれだったので、「今日の地震は、どのくらい揺れたのだろう。少しも分からなかった」と語る。

（そののち、）一人二人と、（豊国神社のことを）人伝えに聞き語り伝える。国内には噂がすぐに伝わるものであるため、京中（の人）がこのことを人伝えに聞き、「豊国神社は、今回の地震で揺れなかったという。その証拠に、あんなにも古びて崩れかかっていた社壇が、少しも壊れているところがない。不思議なことだ」と言っているうちに、移り気な都の者ども、参詣の貴賤上下（＝身分の高い者から低い者まで）、（たくさんの人が押し寄せ

る様子は)まるで蟻が熊野参りをするようだ。年が六十より下の人は、生まれてこのかた初めて遭った大地震なので、正気も無くし、胸がつぶれるほど恐ろしいので、「もしかすると守り神となりなさるだろうか」と思っていることであろうか、日ごろは思い出もしないところへ、我先にと参詣するので、三条寺町から豊国神社まで、参詣の老若男女、びっしりと町中へあふれて押し合いへし合いした様子は、ひどいものである。神前には、散米(=神前に撒き散らして供えるお米のこと)、参銭(=神前に供える銭のこと)を、山のように投げ入れ申し上げ、みんな手を合わせて、「南無豊国の大明神」と、拝み申し上げる。そのむかし慶長四年(=西暦1599年)四月十八日に額をいただいて、廟号を「豊国大明神」と下されたときからこのかた、いまだにこれほどの参詣は前例が無い。

むかしは、近江、山城とって二人の神主を頭(かしら)として、たくさんの祢宜(=神官の位の一つで、宮司または神主の下)や社僧(=神社で神祇のために仏事を修する僧侶)がいた。社領(=神社の領地)が立派に与えられていたので、神主も裕福であって、八人の八乙女(=神社に奉仕し、神楽などを奏する乙女)、五人の神楽男(=神楽を奏する男)が、常に神前にお仕えし、巫覡(ふげき)(=神に仕えて祈祷や神おろしをする人。「巫」は女性、「覡」は男性)の鼓の音は高く、鈴の音は、松風と混じり合って、素晴らしいことであったが、時勢が移り変わってしまったので、神主、社僧も行方知れずに散り散りになり、あんなにも磨きたてられていた社殿も、年々の霧に傷んで、露に朽ちはたて、修繕する人もいないので、眼前に見えていた鳥居、楼門は跡形もなくなり、美しい塀も壊れ砕け、拝殿に掛けられていた三十六歌仙の絵は、どれがその人かも分からないほど取り散らかし、社壇は雨漏りし、軒が傾き、庭には草ばかりが生い茂り、荒れ果てた有り様は、キツネ・フクロウの類(たぐい)以外には、訪れる者もいなかったが、(そのような神社に)今さら貴賤上下の者どもが、道もすれ違えないほど参詣するのも、感心できない。世話をする人もいないので、これほど賑々しいけれども、灯明をかかげることもなく、まして神楽を奉納する者などもなく、神前はあっさり荒れ果ててさびれていた。

さて参詣しに集まる者どもは、手に手に庭の草葉を荒々しく引き抜いて、家に持って帰り、それぞれ軒にかけた。どのような人物が、どういうことでし始めたのだろうか、はっきりしない。カヤやススキはすべてむしり尽くし、マツやスギの枝を折って取ったので、茂っていた草や木も、みなまばらに(なるまで)荒々しく折り取って、あっさり社前は荒れ果てている。京中の貴賤の、家々の軒に吊るしてかけた人の考えは、豊国神社にあやかって、町家も揺れないでほしいと思ったのであろう。愚かにも思い悩み果てて、馬鹿げたことであった。

四【漢文】

【解答例】

- 問一 1 やまいをもってくすりをこわば
2 としまさにくれんとするも(として)

- 問二 a (薬代を払わなくても)問題にしなかった
b (薬代を)まだ払っていなかった

問三 あなたがいなければ、今日を迎えることはできませんでした。

問四 息子が自分のための薬を買ったと聞き、何と引き換えたのかを聞くこと。(三十三字)

問五 自分の病気の薬代を息子が払えなかったことを問題にしなかった羅慶同の一族が織物のようにつながっていくことを祈るため。(五十七字)

【配点予想】(二十点)

- 問一 1点×2 解答通り
問二 2点×2 ニュアンスが出ていれば可。
問三 3点 ニュアンスが出ていれば可。
問四 4点 ポイント以下の通り
a 前半、後半の意味を正しく説明しているか 2点
b 本文の内容を過不足なく補っているか 2点
問五 7点 ポイント以下の通り
a 自分が病気をして息子が薬を買った 2点
b aの代金を息子は払えなかったが、羅慶同は不問にした 2点
c bに感謝し、羅の一族が末永く栄えることを願った 3点

【解説(総合)】

潘士藻「闇然堂類纂」からの出題。儒学者羅洪先の先祖、羅慶同の事績を述べる。本文は例年に比べてやや長いが内容は比較的平易。設問数も例年通りだが、昨年と同じく傍線部そのものの意味を問う問題が多い。

【解説(設問ごと)】

問一 書き下し問題。下句との接続が必要。

問二 傍線部の意味。前後の文脈をも考慮する。

問三 やや難。傍線部の「微翁」の意味が確定し難い。以下の文脈で「翁」の字が羅慶同を指していることからすれば、同じ人物を指すのであろうと考えられる。さらに「微」は「翁」にかかる字ではなく述語で、全体は「翁微(な)くんば、今日に至るを得ず」と読む。

問四 傍線部「聞市薬、問所質」の説明。「薬を市（か）うを聞かば、質とする所を聞かん」と書き下せる。

問五 「儒生」の母がなぜ自分で布を織ったのかを問う問題。ここまでの経緯と傍線以後の文脈を総合してまとめる。

通釈

羅念先先生の祖先に慶同という名の者がいて、善庵と号していた。いつも薬を売って人を救っており、身内かどうかや貧富を問わず、病気で薬を頼まれば必ず良い薬を与えていた。(そして)たとえ薬代の伝票が支払われなくても焼き捨てて問題にしなかった。

以前大雪になり、夜中に戸を叩く音がしたのですぐに起きて(わけを)聞くと、郊外に住む儒学生が母親のために薬を買いにきたのだった。(彼を)引き入れてから座って、感嘆して「夜中に薬を買いにくる者は多いが、たいていは自分の妻子のために必死であって、母親のためという人は今までいなかった。あなたは大変な親孝行者だなあ」と言った。そこで彼の苦勞をねぎらって食事を与えた。儒学生は金の簪を出して薬代と引き換えようとしたので、彼に「母上がこうせよと命じたのか」と問うた。「病に苦しんでいて知りません」慶同は「あなたの母上が病気の時にあなたが薬を買ったと聞いて、何と引き換えにしたのかを問うて、金の簪を引き換えにしたと言ったならば、きっとお怒りになって病気が悪化するでしょう。すぐにお持ち帰り下さい」と言った。自分で良い薬を与え、さらに人に命じて家まで送らせた。

年末になろうとしても儒学生の薬代はまだ払われなかった。(そこで)召使いが伝票を持って、「少しばかりの薬代ですが、どうなさいますか」と言った。慶同は笑って、「お前は私のためにその金を惜しんでくれるのか」と言って火に投じ、とうとう不問に付した。

翌年の春、騎馬を従えたほろ付きの車がやって来た。これに問うと例の薬代を払わなかった儒学生の母子であった。母親が金の縫い取りの布を手を持ち、再拝して「あなた様がいなければ、私は今日という日を迎えられませんでした。あなた様は私どもを児女として見てくださいますが、私はあなた様にお礼ができませんでした。(そこで)病気が治ってから自分でこの布を織って長寿のお祝いをして、これ以降あなた様の一族がこの布のように途絶えることなくつながり栄えることを祈願いたします」と言った。慶同もこれを受けさらに子孫に伝えた。かの慶同どのの善行はこのようなものであった。